

# 最古の楽官は、はたして靈獣だったのか

## 文献資料による音楽の探求とは

筆者は、古代の中国音楽を、文献資料をもとに研究してきた。もちろん、文献資料のみで、すべてが理解されないことはわかっている。ただ、文字として記録されたものは、それが伝承されていくなかで、過去の事実として認識されて、後世の人の感受性や生き方に影響するのは確かだと思っている。だからこそ、ここで中国の古代人が残した記録にあらためて向き合っ、音への感性や、音楽に対する認識が、どう表現されていたのかを考えた。それは確かに当時の彼らがどう生きて、なにを感じ考えたかの反映ではある。しかし、それを読み解くなかで、今を生きる我々にもつながるものを見出し、音の世界をあらためて見直す契機を得られるのでは、と密かに期待している。

## 最古の楽官

連載の最初に、古代の経書『尚書』<sup>しやうしょ しゆんてん</sup>舜典のなかにみられる最古の楽官のもつ偉大なちからについての記載を見てみたい。『尚書』は孔子も「書」として言及しているが、経書と定められたのは前漢の武帝のとき（前136年）である。

皇帝の舜は夔に「なんじは音楽を生業にして我が後継ぎに教えよ」と命じられた。剛直だけれど温和であり、寛容だけれど怖れさせ、強くても残虐ではなく、あっさりしていても傲慢ではないという、均整のとれた人間に導くことができるのが音楽である。詩とは自らの心のうちを表出したもので、歌とは表出されたものを詠じたもので、声（宮・商・角・徴・羽の五声）とは詠じたものに依ってなりたち、律（六律・六呂の十二律）とはその声を調和させるものである。すべての楽器が整い調和すれば、人はたがいに奪い合うこともなく、神と人とが和合するのである。夔は「わたくしが石を打ち鳴らしますと、百獣がともに舞い踊ります」と言った。（帝曰夔命汝典楽教胄子。直而温、寛而栗、剛而無虐、簡而無傲。詩言志、歌永言、声依永、律和声。八音克諧、無相奪倫、神人以和。夔曰於予擊石拊石、百獸率舞）

舜が夔という名の楽官に命じた内容から、当時音楽がどのように崇高なものとして捉えられていたのか、その音楽を掌る楽官が人並優れた技量を持つものであったことが見えてくる。舜が大切な後継者にわざわざ音楽教育をほどこすのは何故か。それは音楽が心を養うと考えたからである。剛直と温和な性質は、どちらも大切ではあるが、正反対である。しかし音楽はそれをうまく調和させる。他人への寛容さと畏怖の念を起こさせるような態度も、どちらも為政者にとって必要である。音楽はそれを偏りなくさせる。さらに強さが高じると残虐にもなるし、他人にクールな態度が高じると傲慢にもなる。しかし音楽はそのように極端に陥るのを回避させる。こうして整った音楽は「神と人とが和合する」という理想を実現すると考えられた。夔が、自分が石を打ち鳴らすと百獣がうち連れて舞うと返答しているのは、音楽のちからが異類へも及ぶことを示したものだろう。素晴らしい音楽の役割とは、どんなものなのか。古代人が考えていたことがここに端的に示されている。

## 靈獣としての夔

さて、興味深いことに、「夔」というのは、『山海経』<sup>せんがいきやう</sup>大荒東

経によると靈獣（図）の名なのである。ちなみに『山海経』は、前漢にはすでに存在した作者不明の空想的な地理書とされる。

「東の海に流波山という山があり、ここから七千里の海のかなたである。

その山には牛のようで、身体は蒼くて角がなく、一本足の野獸がいる。その野獸が海に入ると必ず風雨が起り、日月のような光を放ち、雷のような声を出し、夔という名である。黄帝はその野獸を捕獲して、その皮で鼓をつくり、雷獸の骨でそれを打つと、その音は五百里まで響き、天下を驚かせた。」（東海中有流波山、入海七千里。上有獸、状如牛、蒼身而無角、一足。出入水則必風雨、其光如日月、其声如雷、其名曰夔。黄帝得之、以其皮為鼓、橛以雷獸之骨、声聞五百里、以威天下）

『尚書』舜典の楽官の名と靈獣が同名というのは偶然ではなく、音楽を掌る特別なちからを持つ存在だからこそ、黄帝（舜より前の伝説上の最初の皇帝）が捕獲した靈獣にちなんだ名が付けられたと考えられよう。面白いことに、古代においても、この権威ある『尚書』にみえる卓越した楽官と、不思議な獸が同一のものであるかどうか、その解釈に悩む王がいた。『呂氏春秋』<sup>りゆししゆんしゅう</sup>慎行論の察伝の条には以下のようにいう。

魯の哀公が孔子に尋ねた「楽官の長である夔が一本足というのは、本当ですか」と。孔子は言った「むかし舜が音楽を天下に教えようとして、重と黎という臣下に在野の夔というものを推薦させた。舜は彼を楽官の長にした。そこで夔は六律を正して五聲と調和させ、八風に通じたので、世の人々は大いに夔に信服した。重と黎はさらにほかに夔のような者を探し求めた。舜がいうのには「楽は天地の精であり、物事の得失の節である。だから聖人だけがよく調和させられるのだ、これが楽の根本である。夔はよく調和させ、そこで天下が治まった。夔のような者は一人で十分である」と。だから夔は一人で足ることであり、一本足であるというのではないのだ」と。（魯哀公問於孔子曰、樂正夔一足、信乎。孔子曰昔者舜欲以樂傳教於天下、乃令重黎舉夔於草莽之中而進之。舜以為樂正。夔於是正六律和五聲、以通八風而天下大服。重黎又欲益求人。舜曰夫樂天地之精也、得失之節也。故唯聖人為能和、樂之本也。夔能和之、以平天下。若夔者一而足矣。故曰夔一足、非一足也）

『呂氏春秋』（前239年成立）は、魯の哀公の質問に答える孔子の言を借りて、一本足の野獸である夔と楽官の夔とをここでははっきりと違うものとした。「一人で足る」とは牽強附会のようなのだが、音楽のもつ計り知れないちからを導き出す楽官を、靈獣ではなく、人間として説明した。楽官か靈獣か。夔をめぐる言説には、まず、靈獣の威力が、すぐれた能力をもつ最古の楽官に重ねられたことが示されている。そこからさらに、不可思議なものに悩みながらも、なんとか納得できるように解釈する古代人の姿が垣間見えて親しみがわいてくる。

